

同志社の一貫教育とキリスト教主義—小学校長の経験から

横井和彦

奨励者紹介〔よこい・かずひこ〕

同志社大学経済学部 部長・経済学研究科 長

同志社大学経済学部 教授

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食うか何を飲むかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほども着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食うか』『何を飲むか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

（マタイによる福音書 6章 25-34節）

今年3月まで5年間同志社小学校の校長をしておりました。その経験を踏まえて、今日は同志社の一貫教育と同志社のキリスト教主義について考えたことをお話しします。

同志社の一貫教育

今日の聖書箇所では、何を着るか、何を食べるか、住む場所、つまり衣食住は、私たちの生活の基盤だ、それらについて、思ひ煩う必要はないとされています。多くの人にとっては人生において「受験」が思ひ煩いの種だったという人も多いのではないのでしょうか。一貫教育の最大の特徴はこの思ひ煩いが必要ないということになるのではないのでしょうか。

同志社は1997年、同志社創立125周年にあたる2000年をめぐりに小学校を設立するという検討を始めました。その根拠となったのは、1875年に創立者新島襄が書簡の中で「基督主義ノ学校ハ幼稚園ヨリ大学ニ至ル来迄実ニ必要ノモノト信スレドモ、当時我輩ノ力微々タリ、尽ク之着手シ得サルベシ」と表明していたことに求めることができます。こうした

経緯から 2006 年 4 月に同志社小学校は開校いたしました。今年で開校 18 年目を迎えています。

なぜ「基督主義ノ学校ハ幼稚園ヨリ大学ニ至ル迄実ニ必要」なのでしょう。私は、それは神様が、私たちに思い煩うのはやめなさいとおっしゃっているからだと考えようになりました。神様は、私たちが、何につけ多くのことに思い煩うのを知っています。実際、私たちは衣食住の他にいろんなことについて、思い悩めます。衣食住に関する悩みは、いろいろ枝分かれして、私たちはいろんなことに思い悩めます。ある人は、将来、地震が起きるのではないかと恐れたりします。病気にならないか、事故に遭うかもしれないと思って、恐怖心をもつ人たちもいることでしょう。あるいは、他人が自分をどのように思っているのかで、思い煩う人もいます。人間関係の悩みは絶えることがないでしょう。これらのことを思い煩って、夜もあまりよく眠れない人たちもいることでしょう。いつも何か暗い顔をしている人たちがいます。しかし、どれもこれも、それらの思い煩いは必要ないと主神様はおっしゃっているのです。

創造主なる神様は、私たちを見守ってくださっています。その一日一日を一步一步進んで行くのです。神様が与えて下さっている時間だから、私たちは大切に日々を生きていくのです。明日は明日の風が吹くでしょう。明日のことは、明日が思い悩むのです。私たちが思い悩んでも仕方ないのです。今日の苦労は、今日果たすべき苦労なのです。その日が終わったら、神様に感謝しましょう。だから、今日という日を、神様に委ねて、精一杯生きて行く、これが祝福の人生を生きていく秘訣なのではないでしょうか。そのために「基督主義ノ学校ハ幼稚園ヨリ大学ニ至ル迄実ニ必要」なのだと考えるようになったのです。

「基督主義の学校」=同志社という学校

同志社は、創立者新島襄を通して私たちの神が与えられた恵み、貴い贈り物、わかちあいの大地なのではないでしょうか。同志社は「良心教育」を建学の精神としています。「良心」とはもともと「ともに知る」という「conscience」が起源です。同志社という学校はまさに「わかちあい」の大地なのです。

新島から見て、日本の教育は智育に力を入れる半面、「心育」、今の言葉では「こころの教育」が疎かにされていると言えるのではないのでしょうか。新島には、人は宗教的教育により「良心」を育み、ようやく「人間」となる、との信念がありました。同志社からマックス・ウェーバーの言う「精神なき専門家」や、「良心なき逸材」を生むつもりはありませんでした。「同志社大学設立の旨意」で、「一国の良心」を育成したい、と謳ったのもそのためと言えます。新島は一学生への手紙の中で「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」（良心が全身に充満した青年が現れることを）望んでやまない、と書いています。

この一節は、新島が期待する生徒像を鮮明にあらわしています。この言葉は「良心碑」に彫られ、同志社大学正門近くを始め、日米に 9 基存在しています。すなわち、今出川校地、香

里中高、京田辺校地、新島が学んだフィリップス・アカデミー、新島学園中高、群馬県の高崎自然歩道、岩倉校地、学研都市キャンパス、同志社国際学院にあります。

同志社のキリスト教主義

同志社は「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」を教育理念として掲げています。しかもこの３つの理念は並立しているのではなく、「キリスト教主義」が「自由主義」「国際主義」の「基（もと）」すなわち基礎になっているのです。

同志社はあくまでも自由な学園です。その淵源は創立者にあります。自由を求めて脱国（密出国）した新島襄は、幸いにもアメリカの自由な風土で自由人になって帰国し、京都に自由な学園を創立しました。彼自身「我が大学の空気は自由なり」と断言、自負しています。「自治自由の春風」が吹く学園が彼の理想でした。その自由は、聖書から来ています。「真理はあなたたちを自由にする」と新約聖書（「ヨハネによる福音書」８章 32 節）にあるとおりです。この聖句はラテン語で今出川キャンパスの明徳館ならびに京田辺キャンパスの知真館 1 号館の壁面に掲げられています。

新島襄は、アメリカで大勢の信徒たちから種々の援助を受けて、8 年余も留学生活を経験することができました。正規に大学を卒業した日本人第一号です。そうした留学生・国際人が、同僚のアメリカ人宣教師たちと京都に創設した学園が同志社です。そのため、早くから留学も盛んでした。最初の入学生 8 名のうち 2 名が、1880 年代初頭にアメリカ留学し、帰国後に帝国大学（東京大学）教授になりました。最初の卒業生 15 名中、5 名も留学、それも全員イエール大学です。新島の死後、彼らは次々と新島を継ぐ同志社校長として、恩師の遺志の実現に尽力しました。校舎にしても、ミッシェンの援助で早くからレンガ造りの洋館（チャペルをはじめ、現在 5 棟が重要文化財）が建てられたり、新島の母校（アーモスト大学）から同志社アーモスト館が贈られたりしました。それらは、いまま同志社国際主義のシンボルです。

後に歌う讃美歌のように教会の基、すなわち基礎は、主、つまり神様ですが、同志社の「キリスト教主義」というのは同志社の基、基礎がキリスト教だということです。この同志社礼拝堂が完成した時に創立者新島襄は、「この礼拝堂は、わが同志社の基礎となり、また、精神となる」と述べています。世界の民が集められて、ひとつのからだ、ひとつの糧、ひとつの望みを「共にわかち」あう、それが同志社なのです。

私たち同志社は来年創立 150 周年を迎えます

創立者新島襄は明治 10 年代半ばの演説の草稿のなかで、「人を愛するは、一国に限らず世界の人をも人とみなしてこれを愛せば、決して区域の狭きものにあらず」と述べていま

す。このように世界宗教であるキリスト教に裏打ちされた、一国にとどまらず、人種、民族、国家を超えて、同じ人間同士として愛し合い、国家から独立した民間の力で世界に貢献することをめざすのが同志社という学校なのです。みなさんが創立 150 周年をきっかけに、同志社のキリスト教主義について考え、良心をはぐくみ、卒業後、社会のそれぞれの場でその力を発揮することができるよう願っています。